

学位論文の要約

論文題目 翻訳論から見た英国17世紀の翻訳者たち——古典を訳した人間とその環境

大久保 友博

本論文は、これまでパラテキストとして論ずる対象とされることの少なかった翻訳論を考察の中心に据え、その読解を通じて、翻訳者自身の翻訳思想と、翻訳の実践によるその思想の変化、そして翻訳者の置かれた歴史および社会文化が、環境としてどのように翻訳者に対して影響を及ぼしたのかを解明することを目的とする。その上で具体的な対象として英国17世紀の翻訳者たちに焦点を当て、翻訳研究の見地に基づいて考察する。

本論文は序論、本論（6章分）、結論の全8章で構成され、各章題は以下の通りである。序章「先行研究と本論のねらい」、第1章「マイルズ・スミスら聖書訳者たちと「翻訳長官」フィリーモン・ホランド——万人のための訳」、第2章「ふたりの才人、ジョージ・チャップマンとベン・ジョンソン——古典（語）への恐怖と愛情」、第3章「ジョージ・サンズの旅と空想——慰安としての訳詩」、第4章「ジョン・デナムの立志——作品への予感」、第5章「ロスコモン伯『訳詩論』と翻訳サークル——協訳から競訳へ」、第6章「ジョン・ドライデンと翻訳論の修辞——中庸と甦り」、結論である。

本論部分は、大きく3編に分けられる。

前編部分は第1章と第2章であり、ここでは17世紀の翻訳史を考える上での出発点とされる「逐字訳」の問題と、翻訳環境へとつながる英国の文化および社会の背景を、幾人かの翻訳者に焦点を当てて明らかにする。第1章では、比較的低い階級出身であったマイルズ・スミスやフィリーモン・ホランドらの学者翻訳者が、社会の「益」として翻訳を世に出す際、当時の学校教育の進展からようやく識字が可能になった層へ向けての訳を目指して、総じて平易な逐字訳を選ぶ一方で、それぞれが期待する読書のあり方の違いが、文字の置換と敷衍という2種類の方法論の差として現れたことを見る。そして第2章では、翻訳もなした劇作家ジョージ・チャップマンとベン・ジョンソンの2名を取り上げ、両者が学校で受けた古典教育を検証した上で、チャップマンが学問コンプレックスからかえって旺盛な翻訳を発表し続け、成績もよく古典に親しんだジョンソンが古典教養を作品として昇華し、翻訳についてもむしろ個人的な社交に用いていったことを例示する。

中編部分となる第3章と第4章では、17世紀半ばの大きく変動する英国のなかで、自身の翻訳の捉え方とともに揺れ動く翻訳者らを記述する。第3章では、海外植民を推し進める英国の民として、世界を転々としながらも訳し続け、訳し直すそのたびごとにその訳文を転じさせていった旅人翻訳者ジョージ・サンズの半生を扱い、彼がその翻訳行為を窮状における慰安としつつ、その訳文にその翻訳時の自分の状況を書き込んでいったことを明らかにする。さらに第4章では、内戦の前後およびそのただ中で翻訳を頼りにし、翻訳行為を通じて自己と向き合った紳士ジョン・デナムの半生を詳述し、出世を夢見た時期の翻訳と、立志の試みが失敗して閉塞していた時期の翻訳を比較しつつ、それぞれに付された翻訳論の比喩が内戦前と内戦後の宮廷文芸の環境に強く影響されたものであることを明示する。

そして後編部分の第5章と第6章は、前中編で取り上げた17世紀英国における翻訳行為の積み重ねを元に、翻訳者たちが翻訳のあり方をどのように発展させたかを見る。第5章は、翻訳サークルという協同訳出の現場が、翻訳アンソロジーという訳者が翻訳を競わせる場へと、どのように変化発達していったかをテーマとして、内戦期に亡命していたロスコモン伯ウエントワース・ディロンを中心に、亡命中

に出会ったフランスのカンにアカデミーの活動や、王政復古直後にダブリンで関わった文芸サークルでの翻訳劇上演までの流れなど、彼の周辺環境の影響を検証した上で、さらにロスコモン伯自身が主宰した翻訳アカデミーとその趣意書たる翻訳論の分析を通じてその発展を明らかにしてゆく。最後の第6章では、翻訳論そのものの生成過程に注目して、桂冠詩人ジョン・ドライデンが晩年に取り組み始めた翻訳に付した序文に焦点を当て、それまでに書かれた翻訳論や当時の修辞学の影響下に生まれた彼の翻訳観が、当初きわめて型どおりのものであったのが、実践を経て、自らの意見を変え、具体的になりつつも、一種の自己表現になっていった経緯を追いかける。

そして本論文で取り上げた翻訳者と翻訳論は、これまで翻訳研究でよく整理されるような直訳と意訳の二元論で整理できるものでも、また相互の関連性や連続性がないものでもない。本論文では翻訳という知的営みの歴史における文化的連続性にも留意している。

第1章で取り上げた聖書英訳は、まさしく個々の訳者が先行の訳者と訳文、そしてその訳し方を強く意識した末の所産であった。マイルズ・スミスは、それまでの国教会が向き合った困難の上にはできなかった15箇条の方針を受け取り、既訳を綿密に検討しながらそれを訳文にまとめ、またそれまでの聖書訳者が歴史のなかで受けてきた不運に思いを馳せながら、自分たちの訳とその訳し方についての序文をしたためた。万人のための訳とは、聖書訳者たちの文化を総合して成り立ったものでもある。

学者翻訳者のフィリーモン・ホランドも、同じく学者からの批判に遭いながらも、いわゆる特権階級である学者から古典を解放し、万民の益のために訳そうと努めた。それは学者でもあり聖職者でもある人々が、その学識を万人のために使い、翻訳という形で知識を伝えようとした点では、同じ時代にあって共通している。

第2章のジョージ・チャップマンは、17世紀初めに『イーリアス』という大きな古典を訳したことで、そのあとの翻訳者にとって意識される対象となった。チャップマン自身が捨てたように、その十四音節の詩形は翻訳において反面教師となり、明言されないにしても、デナムやドライデンによってもあえて否定的な態度を取られている。

チャップマンの友人であったベン・ジョンソンは、当時の文化でよくあるように、翻訳をその場限りの社交のなかで用い、それがゆえに多々あったはずの訳文もあまり残らなかった。しかしその閉鎖性ゆえに、偶然生き残った訳文が世に出ると、ホラーティウス『詩論』という原典の重要性から繰り返し注目され、のちにチャップマンと同様、ジョン・ドライデンから批判されることにもなる。

第3章のジョージ・サンズは、はじめは晩年のチャップマンと同じようにプロバガンダに関わりながらも、またジョンソンらと同じ整理帳の伝統のなかで訳文を書きながらも、旅先にてその枠から抜け出すような翻訳を模索した。結果として自己が織り込まれ、未来や死後を見つめるに至った翻訳のあり方は、ドライデンも当初通説や印象によって非難していたが、ドライデン自身の最後の訳書では、同じように翻訳の永続性を考えるに至った彼からその訳が模範視されるに至った。

第4章では、ジョンソンの影響を受けた才人たちによって古典が重んじられ、その翻訳が出世の手段にもなった宮廷で、ジョン・デナムが立志を抱くも内戦もあってその夢も打ち砕かれ、そのなかで先駆的な訳文と翻訳論をあとに残した。王政復古後には、ロスコモン伯やドライデンとも親交があったというが、サンズらと同様に、ドライデンによってその訳業と翻訳論はともに言及されている。

第5章で詳述した翻訳アカデミーは、ジョンソンらの時代から続く紳士階級の座興としての翻訳のあり方と、フランスで起こったアカデミーの形態が、双方に触れたロスコモン伯によって融合され、発展したものであった。その形はドライデンを通じて、翻訳アンソロジーという形態に転じ、18世紀翻訳文化への道を作るに至る。

そしてジョン・ドライデンを考察の対象とした第6章では、先行の訳者たちを意識しつつも、訳文と翻訳論を書き続けてきた人物が、その実践を経て、翻訳論のなかで自己を表現しようとするに至った、

一連の過程を追いかけ、その過程では、上記の翻訳者たちの訳文と翻訳論が常に意識されていたという点を明らかにした。

翻訳者たちは、17世紀という変動する時代のなかで、翻訳文化という大きな伝統において互いに影響し合いつつ、翻訳行為を通じてそのなかにある他者と向き合いながら、自己を有する人間としてどのように訳文を書くべきかということを常に考え、そのかたわらで翻訳論を記し残してきた。

以上の考察から、本論文は、訳者は翻訳を通じて自分の（そして環境の）変化を受け止め、その結果が翻訳論として現れることを明らかにした。そして過去・現在・未来をも含めた、大きな歴史・文化・社会という環境と、翻訳しつつ変転する人間というふたつの要素が、総合されて現れているのが翻訳論であると結論づける。